

－ 巻頭言 －

教職員の連携による専門性の強化

原 道生*

総じて、現在、日本の大学図書館は、大きな変動の波に直面させられているといってよいだろう。そのことは、昨 2005 年 4 月に館長職に任ぜられて以後、各種の図書館関係者たちの会合に参加した折々に、そこで論じられる議事の内容や、個人的な懇談の際の話題を通して、何よりも強く感じさせられている事柄なのである。

もとより、そこには、さまざまな要素が複合的に働いているという事情を考えておかねばならないが、とりあえず、まずその第一のものとしては、近時、単に大学のみに限ってのこととしてではなく、一般・専門、あるいは、公立・私立のすべてを通じて、日本の図書館そのものが、内面的しは外的な理由に迫られることにより、従来とはかなり異なる新しい行き方の選択を強いられているという状況にあることをあげておかねばならない。

そして、その上、第二には、周知の通り、昨今の日本では、国・公・私立のいずれであるとを問わず、全国ほぼすべての大学において、将来的な存続を賭けての大幅な制度改革の試みが急テンポで進行中であり、そのため、当然、学内の一機関としての図書館も、そうした試行錯誤の流動的な渦中の存在であることを免れるわけには行かなくなっているという点を、

*はら・みちお／明治大学図書館長／文学部教授／国文学、日本近世文学、日本古典芸能

考慮に入れておく必要があるだろう。

しかも、それに加えて、第三には、各大学の図書館それぞれにおいて、本来ならばそれ専一に時間と労力を費して取り組み解決を図るべきはずの固有の諸問題が、多様に絡み合ってきているという事例も、決して少なくはないようなのである。

ともあれ、これら諸要素の複雑な混淆の中にあつて、日本の大学図書館は、私見によれば、多くは外的諸条件のドラスチックな変化に対する現実的な対応に追われつつ、各自の掲げる基本的理念の十全な具体化を目指しての模索に努めているというのが実情なのではないかと思われる。

ところで、そうした状況下に置かれているという事情は、本学図書館の場合も、その例外というわけには行かない。試みに、それら上記諸要素に関連する事例のうちの代表的な幾つかを紹介しておくならば、第一の点に関するものとしては、書籍代、とりわけ海外の定期刊行物の価格の高騰や電子媒体利用への対応に伴う経費の増大など、第二の件では、現在本学図書館においての最重要課題となっている、和泉地区基本構想中に位置づけられた新和泉図書館建設計画進捗の見通し、さらに第三のものとしては、貴重書の保管・活用のための方策や、予算節減の方針の下でのサービス水準の維持等々を、直ちにあげることが可能なのである。

しかしながら、これらの具体的な諸問題に関しては、平素さまざまな形で取り組みに努めていることでもあるために、ここでは、これ以上の言及は避けることにして、以下、上記のような大きな変動の中にあつて、今後、本学図書館が追求し続けるべき基本的な姿勢は、大学図書館たるにふさわしい専門性の強化を図ることにあるという点につき、若干の考えを述べてみることにしたい。

ただし、その際、誤解のないよう最初に断っておかなければならないが、ここで私のいう「専門性の強化」とは、当然教員に対する研究支援にかなりの比重のかけられたものになるとはいえ、それがそのまま、本学図書館にとっての重要な使命である、学生のための学習支援や地域住民に向けての文化的貢献といった事柄を、軽視しようとするものでは決してない。むしろ、それとは逆に、そうした二つの目的を十全に達成させるためにこそ、大学図書館としての真の力量が問われる「高度の専門性」が、不可欠

の前提とされているのであり、さらにいえば、それらの実際的な目的に資するということが十分に出来るようであれば、正しい意味での「高度の専門性」とはなり得ないのではなかろうか。一方では、常に現実的な事態への即応を避けるわけには行かないという立場にある大学図書館が、その本来的なあり方を見失うことのないよう努めてゆくためには、以上のような基本的姿勢を堅持し通してゆくことが、何にも増して大切なことと思われる。

話が少々抽象的に流れてしまったが、最後に、これも私が館長に就任して以来、ひそかに抱き続けている個人的な感想を一つだけ披露しておこう。それは、本学図書館においても、そこを舞台に、教員と館員が活発に交流し、協力し合えるような機会をもっと作ることが出来ないだろうかということである。もちろん、そのことは、個人的レベルにおいてはさまざまに行なわれ、それぞれに実りある結果を生んだりもしているという事実は承知しているが、ここでは、それをさらに広く開かれた形のものとして定着させて行けないものかと考えている。

さいわい、本学には、研究者として高度の専門的知識を身につけた教員は大勢いるし、また、図書館員として優れた専門的スキルを身につけた職員も多数いる。そして、既にそのような両者の専門性を生かした協力・連携の試みは、例えば、『蘆田文庫目録 古地図編』の編纂や学部間共通総合講座「図書館活用法」の開設、さらには、アフリカ文庫その他における講演会の開催等、幾つもの注目すべき成果を生み出してきた。けれども、私の印象では、明治大学における両者の潜在能力は、決してこれに止まるものではないだろう。

今後は、さらに両者より成るさまざまな研修や共同研究の機会を通じて、その専門性を相互に高め合うことが可能となるような知的交流の場を創り出してゆくことが、上記の基本的な姿勢を保証するためのものとして、大きな力を持ち得ることになるに違いない。

お互い、極度に多忙な日常に追いまわされているのが実情だが、将来、明大図書館を支えることになるはずの貴重な基盤を確立しておくためにも、何とか実現を図れないものだろうか。